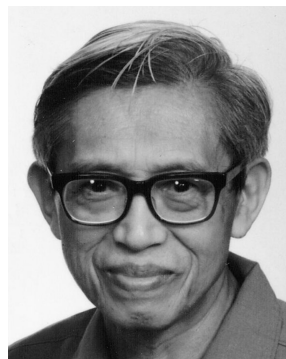


大山勝通名誉会員のご逝去を悼む

日本気象学会名誉会員、大山勝通博士は2006年12月19日、77歳で急逝されました。この数年、ご病気とは伺っておりましたが、まさかこのようなことになるのは思いもよらず、突然の訃報を、驚きと悲しみ、ぼう然とした思いで受けとめ、大山博士の国際的な業績と個人的な想い出の中で何日かが過ぎました。今は慎んで哀悼の意を表すことしかできないのが残念でなりません。

大山博士は1929年3月に札幌で生まれ、1951年に東京大学理学部物理学科を卒業されて後、気象庁（当時は中央气象台）に入庁、観測部観測課に配属となり、その間、定点観測船で勤務した経験ももっておられる由、その後すぐに（1952年12月）、予報部予報課に移られました。1955年7月、出張で渡米され、その後休職、1959年、米国に滞在することを決意されて気象庁を退職されました。気象庁にとって優秀な人材を失ったわけですが、その後、世界的な優れた研究をされたことを考えれば、日本の気象界にとってもよいことであったと思います。当時は、1970年代の初め頃まで、多くの方が米国での職を得られ、いわゆる頭脳流出の時代であったのですが、その方がその後、今日に至るまで国際的に活躍されました。それは日本の気象界の誇りでもありましたし、後輩の私たちの大きな刺激ともなり、陽に陰に指導していただくことになったことを思うとき、気象界の発展にとっても大きな意義をもった時代であったといえるかと思えます。

渡米されて後、ニューヨーク大学で1958年に博士号を取得されました。このすぐ後に、熱帯低気圧（台風）の研究で気象学の歴史に残る大きな研究をされることとなります。1960年代の初め頃は熱帯低気圧の発生、発達論、数値シミュレーションが気象界における最重要テーマの1つでした。多分、多くの研究者がこの問題に取り組まれたのではないかと思います。発表された論文では、台風をうまくシミュレートできず、熱帯大気の特徴である条件付不安定から生ずる積雲対流を変形した形で表現するような結果だけが得られていました。このような中で大山博士は、積雲対流



の効果をパラメタライズするという新しい手法を導入し、また、これを大気境界層での摩擦収束と関連付けた形でモデル化することによって、台風の水平スケールと時間スケールを見事に説明できる理論モデルを提出されました（1963年）。さらに大山博士は、そのモデルで用いられていた微小振幅の仮定の問題点を重視されて、非線形の数値モデルを開発され、数値実験によって、台風の本質の多くを見事にシミュレートすることに成功しました（J. Atmos. Sci., 1969）。これらの研究成果に対して1968年にアメリカ気象学会からマイジンガー賞を受賞されました。また、日本気象学会からも1972年に気象学会賞を受賞されています。このときの大山博士の業績は、単に優れた世界的な研究をされたということにとどまらず、その後の台風の研究の発展にとって極めて重要な役割を果たした点にあると思います。

積雲対流の効果をいかにパラメタライズしてモデルに組み込むかという問題の重要性を強く認識しておられた大山博士はその後、この問題をさらに発展させた論文を書かれています（気象集誌, 1971）。今日まで広く用いられている荒川・シューバートのパラメタリゼーション(1974年)と共に、概念的には研究の1つの重要な方向を示したものと私は受け止めていました。

その後、ニューヨーク大学の理工学部の廃部もあって1973年に、教授の職を辞されてNCAR（米国立大気研究センター）に移られました。その直後に、GARP（地球大気研究計画）の一環としてのGATE

(GARPの熱帯大西洋実験)が始まりましたが、大山博士は熱帯におけるデータ解析に適した新たな客観解析の手法を研究されました。その成果はNCARを去られてからしばらくして発表されています(Mon. Wea. Rev., 1987)。

大山博士は1980年にNOAA(米国立海洋大気庁)の附属機関であるマイアミにあるAOML(大西洋海洋気象研究所)のHRD(ハリケーン研究部)に首席研究員として移られ、退職までの20年余をそこで過ごされることになります。その間、ハリケーンのモデリングに関する研究でNOAAの賞である優秀論文執筆賞を3回受賞されています。その中で3次スプラインの方式を用いた数値モデルはハリケーンの順圧移動モデルに取り入れられHRDでの研究に貢献しています。しかし、大山博士の気象学上の貢献はむしろその後に始められた非静力学モデルの基礎論にあったと思います。非静力学モデルそのものは古くからありましたが、モデル開発にあたっての熱力学的な面の基礎づけをきちんと行なうことの重要性を認識され、このような立場からの研究を1980年代の後半から始められ論文として発表しておられます(J. Atmos. Sci., 1990, 2001)。以下は、オリジナルな論文ではありませんが1982年に日本気象学会の100周年記念号に熱帯低気圧に関するレビュー論文を寄稿されています。また、1997年にアメリカ気象学会のハリケーンと熱帯気象に関するコンフェレンスで発表されたものはフットノートとして発表されています。これらは含蓄に富んだ、そして、また、大山博士の、研究に対する厳しさと奥の深さを感じさせるものだと思います。

大山博士は2001年にNOAAの職員としての職を辞され、その後は非常勤でHRDの研究にもかかわられました。2003年3月28日に退職されたとのこと。

この追悼文は、名誉会員の追悼ということで気象学会理事長の依頼によるものです。以下は、個人的な想い出を含めて記したいと思います。

大山博士に初めてお会いしたのは1968年に東京で開催された数値予報国際シンポジウムのときでした。大山博士の1963年の論文に基づく研究を行っていた幸運もあって、1969年10月からの2年間、ニューヨーク大学で研究員として研究する機会を与えて下さいました。家族を含めてお世話いただきお付き合いをして下さったことを含めて、それは私の人生の中で最も充実した幸せなときであったと思います。

ニューヨークから帰った翌年1972年5月に気象学会賞の受賞と講演のために来日されました。その後は、1982年つくばで開催された熱帯気象学の国際会議、1986年の東京での数値予報国際シンポジウム、1993年、気象庁で行われた熱帯低気圧に関するワークショップで来日され、その度に、大山博士とお話する多くの時間をもって下さったことは私にとって有難く嬉しいことでした。米国では、1989年のサンディエゴでのハリケーンと熱帯気象のコンフェレンスでお会いし、その時はマイアミの研究所をみせていただきました。また、ご自宅に泊めていただいたときのことも懐かしい思い出です。1999年のダラスでのコンフェレンスが大山博士にお会いした最後になってしまいました。大山博士は前述のように2003年に退職されたのですが、その後はメールを通して、大山博士の2001年の論文と関連の深いスコールラインの論文を読んで下さいました。また、私のこれまでの研究をサポートし激励して下さいたことは研究を進めていく上で大きな支えになっています。

ニューヨークでお世話になっていた1970年頃、新田尚博士(後に気象庁長官)と3人でお会いしたことがあります。新田博士の言葉をお借りすれば、大山博士は天才肌の方で、ご自分に厳しい方ということだと思います。また、そのお人柄の故に、ニューヨークでの2年間とその後を楽しくご一緒させていただくことができたと思っています。

これは新田博士から伺ったことですが、気象庁がコンピュータ(IBM704)を1959年に導入し、数値予報を業務化する際に、在米中の大山博士は、米合同数値予報組織の担当者に疑問点を照会して回答を寄せて下さるなど、気象庁からの多くの注文に献身的に対応されたとのこと。

最後に、私は2004年に体調を崩したことがあります。そのことをメールでかいたとき、ご自分のご病気のことを詳しくかいて下さり、そのとき初めてご病気のことを知りました。以前ダラスでお会いしたときはお元気そうでしたし、そのときもご自宅で過ごされているということでしたので安心していましたが、昨年12月思いがけない訃報を受け取ることになってしまいました。退職後は古巣のニューヨークに戻られて、ご家族との生活を楽しまれておられたのに残念でなりません。心からご冥福をお祈り致します。

(地球環境フロンティア研究センター 山岬正紀)